

米寿を迎えて

九回生 飯島 泰蔵



一・賀の祝い

平成二十四年九月二十四日、私は満八十七歳を迎えた。最近は何歳を表すのに満何歳という言い方が慣例化しているが、昔は数え年何歳という言い方の方がむしろ普通だった。満年齢では誕生日が節目となるが、数え年では正月元日が節目である。従って正月を迎えることの意義で言うならば、むしろ満年齢は影が薄く数え年の方にこそ軍配が上がる。

昔から代々伝わってきた年齢に関わる諸行事は、その多くが数え年を基準として行われてきた。私は今年の正月に数え年 八十八歳となったので、今年は将に世に言う「米寿」なのである。実は十一年前に「喜寿」を迎えたのだったが、その時は体調を崩して仕舞っていたので、それどころで無かった。平穩無事に済みそうな今回の米寿を、内心有り難く思っているところである。

数え年は皆が正月に一斉に一歳年を加えるので、分りやすいだけで無く、新年を迎える意義を振り返り、威儀を正すということにも繋がる。年の暮れに誕生した赤子が正月には早々と二歳だというのは、少し解せない感じがしないでも無いが、自分だけで納得する様な満年齢よりは、皆に取って共通である土台の上に据えられた概念として、数え年には何となく近親感がある。「早生まれ」「遅生まれ」という区別は数え年なればこそ生まれたものだが、それに親しみを覚えると言うのは、私自身が古い時代に生きてきた証拠なのかも知れない。

年齢の節目には、昔から然るべき名前が付けられている。士農工商時代の昔は、十五歳になると「元服」と称して、剃髪の様式が行われた。この儀式を境にし

て、一人前の大人と認められたのである。明治開国以後はこの儀式は廃れたが、満二十歳を過ぎたところで「徴兵検査」という制度が始まった。国家を守り維持して行くために「国民皆兵」という概念が持ち上がり、それに呼応した制度として登場したのである。しかし終戦後我が国には軍隊が無くなり、徴兵制度は廃止された。その代わり子供から大人への切り替え時期を示すものとして、「成人式」という制度が新たに登場した。年齢的に見れば徴兵検査が成人式にすり替わったことになるが、徴兵検査が男性に限られていたのに対して、成人式は男女を問わない点で、大きな相違点である。

人間は幼児期に始まり、少年期、青年期を経た上で、成年に達する。即ち大人になる。大人の時代は長いが、若年、壮年、老年と言う順序を辿ることによって、遂には人生を終える。その間には実は幾つかの節目が作られていて、その都度思いを新たにさせられることになる。二十代、三十代は大人になってからの試験の時代で、次々と未知の経験を積みながら、社会的責任を果たし、手腕を振るうことになる。しかし纏て「不惑」となる。即ち四十歳という節目である。論語で述べられている様に、この年になれば何事に拠らず惑うことが無くなるものである。成人以来二十年に亘った

歲月を経て、能力と自信とを培った結果と言えようか。この節目を過ぎれば人生は、力強い展開を繰り広げる様になる。即ち人々に働きかけ、世の中を動かし、思う存分に腕を揮って成果を果らせる時期である。そして二十年、「還暦」という節目がそこで待っている。

曆に記されている様に、毎年新年を迎える度に、十干、十二支の組み合わせで決まるその年の呼び名が巡ってくる。「ひのえうま」、「つちのとうし」等がそれである。この呼び名は六十年を周期としているので、還暦を迎えた年に最初生まれた時の呼び名が戻ってくる。新たに赤子に生まれ変わって人生を直そう、というのが還暦の意義であろう。それから十年、七十歳となつて「古希」と呼ばれる歳になる。昔は「人生五十年」と言われて、五十年生きるのは精一杯のことだったから、七十年も生き延びるのは並大抵のことでは無かった。「古今希なり」というのが古希の語源である。

その後八十歳で「傘寿」、九十歳で「卒寿」、百歳では「百寿」と呼ばれる。これらはそれぞれ数字の形を読み替えることによって、名付けられたものである。また九十九歳は百歳から一歳を差し引くという意味で、「白寿」と呼ばれている。この他にも格別目出度い歳として「喜寿」、「米寿」が定まっている。前者

は七十七歳、後者は八十八歳だが、これらも数字の形から来た呼び名に他ならない。

二・経過時間への感覚

さて米寿を迎えた私だが、実のところよくこの歳まで生きて来られたものだ、我ながら感心している。しかし昔を静かに振り返ってみると、幼かった頃の一年が如何に長かったか、が思い出される。それに比べると最近の一年は、瞬く間に過ぎ去って行くではないか。この違いはどこから来ているのだろうか。思うに時間の経過に対する感覚は、「経過時間の生存時間に対する比」で定まっている、と私は考えている。感覚量は本来無次元量で無ければならないから、上記の定義で二つの時間の間の比の形になっていることは、いとも合理的である。経過時間が同じでも、幼い頃は生来の生存時間が短いから、この比の値は比較的高めとなる筈である。ところが老年期ともなれば生存時間は著しく長めとなっているので、この比の値は小さくなる訳である。幼い時の一年に比べて老年期の一年がいつも短く感ぜられるのは、こうした理由からであろう。

小さい頃は一年がとても長いと感じられたので、大人になる為には大変な時間が掛かりそうだと、思ってた。しかし今は一年が瞬く間に過ぎ去って行くので、百歳になるまで後十二年の期間だと言っても、それは直ぐ来て仕舞いような感じである。尤もそれまで寿命があるかどうかは別問題だから、今後の予想については慎んだ方が良さそうに思える。

それよりは経過時間に対する感覚が、実は年齢と共に鈍感になってきている、と言う事実注目しよう。「春宵一刻値千金」という言葉が知られているが、千金に値する程の大切な時間が忽ちの中に過ぎ去ってしまうと言う思いがするのは、時の移り変わりを大切に见守ろうとする心が、実は其処に宿っているからである。歳を取った結果時間を無駄に過ごしても平気で見られるという無頓着さがあるとすれば、それは如何にも情けない仕儀である。だが理屈では分かっているも身体がついてこない、と言う現実がある。これこそは将に歳を取った証拠なのだろう。

三・長寿への道を辿って

地球上に生息する生物の平均寿命は、その生物が属する種類によってそれぞれ異なっている。犬や猫の平均寿命は十五年程だが、人間は本来三十〜三十五年位だったとのことである。しかしその後食糧事情や住環境の改善が進んだお陰で、戦前は約五十年と言われていた。それから半世紀以上が経過した昨今では、既に平均寿命八十年の時代を迎えている訳である。真に有り難い時代になった、と言わねばなるまい。

私は既に平均寿命を超えているが、過ぎ去った日々を思い返してみると、様々な過去の出来事が思い浮かんでくる。二十歳の成人に達した頃は戦時中で、程なく軍隊に取られた後は、饑饉戦場にも向かわねばなるまい、と覚悟したものであった。

ところが終戦を迎えた後は世の中は大きく変化して、未来に希望が持てる明るい時代の到来となった。饑饉様々な出来事が相次いで起こって、目まぐるしい戦後社会の大変動期を迎えるのだが、それは私が歩んだ戦後史とも絶妙に重なって展開されて来たものだった。記憶に残るこれらの種々の出来事は忘れられない

想い出そのものであるが、ここではそうした事柄の記述を省略して、その後訪れた私の晩年の方に、目を向けることにする。

満六十歳を超えた翌年、即ち昭和六十一年三月に、私は東京工業大学を「停年」で退官した。教育・研究と言う本職に専念して過ごしてきた私は、それまでは無我夢中でひたすらに前を向いてのみ歩んできたのだったが、停年という節目に出逢ったことで、今後次々に迎えることになる筈の新しい節目に対して、身構え始めていたのである。

程なく私は六十五歳という年齢に到達した。世間では六十五歳以上の人達のことを「高齢者」と呼んでいる。しかし自らを振り返ってみるとまだまだ老人と言われるにはほど遠く、引き続き私立大学に職を得て、教育・研究の仕事を展開していたのである。だが満七十歳を超えた年、それまで遙か彼方にあると思っていた「第二の停年」が私を待っていた。いよいよ正真正銘の停年がやって来て、その後の私の日々の生活は、「サンデー毎日」を続けることになった。老人の仲間入りをしたと言う実感が、少し宛迫ってくる。世間ではそれでも七十五歳までを「前期高齢者」と呼ぶそうだが、将にそれである。しかし程なく満七十五歳の誕

生日を迎えると、それ以降は「後期高齢者」であると宣言されるに至った。遂に本格的な老人になったと実感したのは、その時であった。

我が家の書齋で過ごす毎日が平常化すると、知らない間に意識状態も変化を受けることになる。七十五歳を境目として老境に近付いたと感じたのは、このこととも関係していたであろう。それからの十年は瞬く間に過ぎ去って、遂に八十五歳を迎える。更に一段と老境の深みに入つたと実感したのは、その頃であった。長年付き合ってきた数人の親しい友人達が、相次いでこの世を去つたことも関係している。長寿は目出度いことだと人は言うが、友人達が去って仕舞つた後を、独り黙々と生きて行く状況を言うのだとすれば、それは目出度いよりはいつも淋しいことなのだ。

四・むすび

米寿を迎えての感想を綴ってきたが、それは浮き立つ様な喜びでは無く、むしろ静かに染み通って行く様や寂寥感であった。何時までも若いと自分に言い聞かせながら長年の歳月を過ごしてきた私だったが、その裏では、何時までも元気でいたいという願望と、老人

になるのはまだまだ先でよいという独りよがりだが、それを支えていたのである。しかし大自然は個人の思いとは関わりなく、その大きな力で迫ってくる。老いの進行は將にその一つであった。逃れようも無いその現実を正面から正直に受け止めて、事態を正視するべきだったのである。

振り返ってみると、八十八年に亘って積み上げてきた私独自の長い歴史が、其処にあった。史実の背景を支えていた年齢とは別に、若さから老いへ向けての微妙な変化が、実はそれに伴って裏打ちされていることに、気付かされた。

長い間老いというものを考えたことは無かった。フト気が付いて自分が既に老人であることを悟った時、老いを実感したことに感動した。そして遂にその時が訪れたのだ、と思つた。これからの自分は老人であり、今後命の続く限り老人以上のものになることは無い。

何処までも続く老人の道！ 米寿はその道の入り口だったのかも知れない、と思つて居るところである。